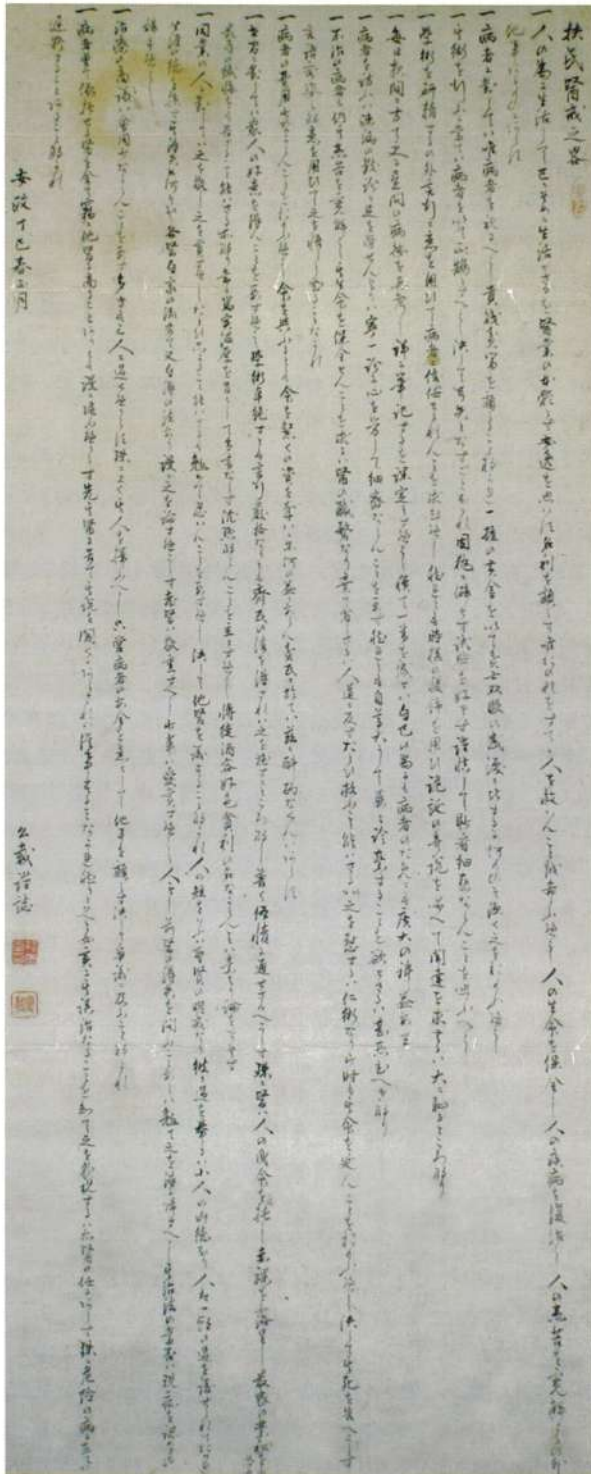


除痘館記念資料室だより

緒方洪庵記念財団 除痘館記念資料室 第19号

OGATA KOAN MEMORIAL FOUNDATION, THE ARCHIVES OF SMALLPOX VACCINATION HOUSE, OSAKA. NEWSLETTER, NO. 19.



緒方洪庵「扶氏醫戒之畧」(緒方家本)

- ・「扶氏醫戒之畧」(億川家本)の財団移管について… 緒方 高志
- ・「奈良県醫局」関係史料の紹介
- 奈良県立図書館「藤田文庫」所蔵筆録文書の紹介—
浅井 允晶
- ・曾祖父・緒方光太郎の出自について…………… 藤井 章
- ・大坂除痘館創設時の種痘「引札」の分苗所記載をめぐる問題
—「京新町三条上ル所」と「伏見伯耆町」—…………… 浅井 允晶
- ・謎のガラスの球体とX線の導入…………… 川上 潤

「扶氏醫戒之畧」(億川家本)の財団移管について

緒方 高志

「扶氏醫戒之畧」は、緒方洪庵が「医」の倫理十二か条を記したもので、洪庵の精神を示す資料として多く知られている。これはドイツ、ベルリン大学のフーフェランドの著した原著を洪庵が『扶氏経験遺訓』として重訳し、その最終章を十二か条に抄訳したものであったが、これには三種のそれが存在する。

一つ目は洪庵夫人・八重の弟、億川信哉に洪庵が贈ったと思われる「安政丁巳(安政4年)春正月」付けの縦長・軸装の「扶氏醫戒之畧」であり、二つ目は、同じ日付けの横長の卷子装で、十二か条の原本を推敲、朱と墨で加筆訂正した緒方家本である。緒方家本の巻末に「右件の十二章は扶氏遺訓巻末に附する所の醫戒の大要を抄訳せるなり、書して二三子に示し、亦以て自警と云爾」の一文を朱書しているのは有名である。

一つ目は億川家伝来の一品として、また二つ目の緒方家本は現在、大阪大学適塾記念センター所蔵となっている。それ以外にまた、億川家本の内容を裁長水の描いた洪庵の画像の上部に賛の形に配したものなども存在する。三つ目がこれである。三つ目は、洪庵が自らの画像を画幅に備え置き、適宜適塾生ら関係者に贈ったものであろう。

このような「扶氏醫戒之畧」は、ヒポクラテス由来の「医」の倫理をフーフェランドを介して洪庵が受容し、継承した精神であり、洪庵を理解するうえでも主要な意味を持っている。

このうち、一つ目の億川家本の「扶氏醫戒之畧」が、このたび縁あって当緒方洪庵記念財団に移管されるに至った。億川家本は八重夫人の実家に伝来する貴重な資料であったが、今後の資料の保存・管理の課題などから億川家が財団に委ねるという英断を下されたものである。財団にとっても長年の夢の実現となるだけに有難く、億川家のご厚情に深謝し、この貴重な資料を末永く世に伝えて、緒方洪庵や大坂の除痘館についての研究に資するべく活用させていただきたいと思っている。

(緒方洪庵記念財団・理事長)

大阪の「除痘館」は、幕末に導入されたエドワード・ジェンナー開発の牛痘種痘法を用いて牛痘苗(ワクチン)接種により天然痘(痘瘡)禍から人々を救った緒方洪庵を核とする医師たちの活動拠点。種痘所とも称する。

づけの中、場合によっては大坂除痘館サイドが引札を急ぎ作成する中で思いを馳せる結果を生んだとみることもできる。

いずれにしても、大坂除痘館の最初の種痘「引札」に「京新町三条上ル所」と「伏見伯耆町」の名が掲載されていることには、除痘館創設時の活動における洪庵や葛民らの微妙な心の動きを読み取ることもできるであろう。

(緒方洪庵記念財団、

除痘館記念資料室・専門委員)

謎のガラスの球体とX線の導入

川 上 潤

除痘館記念資料室のある緒方ビルの書庫には、ミカン箱数個に入った謎のガラスの球体(図1)がある。この球体の存在を筆者が知ったのは四十数年も以前のことである。医療用の器具であることは容易に想像できたが、用途は判明しないまま時が過ぎていた。

昨年秋に京都へ行く機会があり、そこでずっと気になっていた島津製作所創業記念資料館を見学する機会を得た。そこにはやはり緒方ビルにある謎のガラスの球体が表示されていた。その正体はやはり医療用レントゲン器具であった。

レントゲン線(X線)の発見はウィルヘルム・レントゲン(1845~1923)が1895年に放電管を用いて行った実験に起因する。これは放電管内の真空中でマイナス極からプラス極へ直進する電子の流れが観測される線状の放電現象の実験中に、透過性の強い未知の放射線があると結論づけたものである。この未知の放射線は、数学で使う未知の数“X”を用いてX線あるいはレントゲン線と呼ばれた。

1896年(明治29)にレントゲンはX線撮影



図1 ガラスの球体

に成功した。日本では、X線発見から11か月後に島津製作所がX線撮影に成功している。当時医療用レントゲン装置による撮影は、額状のケースに入れたレントゲンフィルムを患者に持たせて撮影していた。撮影作業をする医師は患者の傍に付き添った状態で撮影していたため、日々撮影に携わる医師は相当量被爆していたことが想像される。

緒方ビルで所蔵する医療用レントゲン装置(ガラスの球体)を導入したのは、緒方正清先生である。大阪市西区新町にあった総合病院の緒方病院が、明治36年(1903)に発行した『緒方病院一覧』中の院内設備の項目に、「X光線器：人体内透視の用に供す」と記されていることから、西区の緒方病院でのレントゲン装置の導入は明治36年以前であることが判明する。今橋産婦人科緒方病院での導入については、正清先生の孫世代の緒方正名先生が、「明治40年頃正清先生がレントゲン撮影と治療について研究していた」と述べていることから、それ以降の導入であろう。

今回、ガラスの球体に併せて調査したのは、大正4年(1915)正清先生が記録した入院カルテである。当時のカルテはドイツ語で

記録されているが、看護師による記録は日本語である。それによると、9月21日と23日、浣腸処置の後に「レンチェン放射療法施す」とある。レンチェンは発見者レントゲン氏のRoentgen(英語表記)の古いカタカナ表記である。同年1月からのカルテを見ていくと、早朝5時頃から手術した記録も数回ある。

正清先生は、限りある時間を多くの患者と向き合いながらも、明治42年(1909)には北里柴三郎先生らと共に外遊(欧州、米諸国視察)し、立ち遅れていた日本の産婦人科医療現場に、西洋の進んだ医療技術や医療機器を導入することに注力している。今回示した医療用レントゲン装置の産婦人科への導入もその一つといえる。そのほかにも助産婦(助産師)の養成や医師会での活動、産婦人科関連出版物の発刊などに精力的に取り組み、大正8年(1919)8月22日に他界した。亡くなる二日前に発行された1810頁の大作『日本産科学史』が遺作となった。享年56歳。

日本の産科学における役割の大きさを、改めて認識したいものである。

(緒方洪庵記念財団、事務長)

除痘館記念資料室 ご利用の手引き

- ◆利用時間 午前10時~午後4時(土曜日の利用は午前中のみ)
- ◆休 日 日曜日・祝祭日・年末年始(臨時の休日あり)
- ◆参 観 料 無 料 ◆所 在 地 緒方ビル 4階

発行：緒方洪庵記念財団 除痘館記念資料室

『除痘館記念資料室だより』第19号 NEWSLETTER, NO. 19.

OGATA KOAN MEMORIAL FOUNDATION,

THE ARCHIVES OF SMALLPOX VACCINATION HOUSE, OSAKA.

〒541-0042 大阪市中央区今橋3丁目2-17. 緒方ビル

TEL(直通) 06-6231-3257. FAX. 06-6231-3256.

